

## 「マルタ島での出来事」

2016年10月13日

使徒言行録 28 章 1 節～10 節 わたしたちが助かったとき、この島がマルタと呼ばれていることが分かった。島の住民は大変親切にしてくれた。降る雨と寒さをしのぐためにたき火をたいて、わたしたち一同をもてなしてくれたのである。パウロが一束の枯れ枝を集めて火にくべると、一匹の蝮が熱気のために出て来て、その手に絡みついた。住民は彼の手にぶら下がっているこの生き物を見て、互いに言った。「この人はきっと人殺しにちがいない。海では助かったが、『正義の女神』はこの人を生かしておかないのだ。」ところが、パウロはその生き物を火の中に振り落とし、何の害も受けなかった。体がはれ上がるか、あるいは急に倒れて死ぬだろうと、彼らはパウロの様子をうかがっていた。しかし、いつまでたっても何も起こらないのを見て、考えを変え、「この人は神様だ」と言った。さて、この場所の近くに、島の長官でプブリウスという人の所有地があった。彼はわたしたちを歓迎して、三日間、手厚くもてなしてくれた。ときに、プブリウスの父親が熱病と下痢で床にいたので、パウロはその家に行って祈り、手を置いていやした。このことがあったので、島のほかの病人たちもやって来て、いやしてもらった。それで、彼らはわたしたちに深く敬意を表し、船出のときには、わたしたちに必要な物を持って来てくれた。

パウロたちを乗せた船は地中海の嵐を乗り切り、浅瀬に乗り上げた。船は大破したが、乗船者たち 276 人は一人の命も失うことなく、上陸することができた。そこはマルタ島であった。島の住民たちは、難破船から上陸して来た人々に大変親切にしてくれ、降っていた雨の寒さをしのぐために、たき火をたいてもてなしてくれた。パウロが一束の枯れ枝を集めて火にくべると、一匹の蝮が、熱気のために出て来て、パウロの手に咬みついた。住民たちは、パウロの手にぶら下がった蝮を見て、互いに言い合った。「この人はきっと人殺しにちがいない。海では助かったが、『正義の女神』はこの人を生かしておかないのだ。」海の嵐からは助かったが、「正義の女神」は生かしておけないと、蝮を送った。もうすぐ、体が腫れ上がるか、急に倒れて死ぬだろうと、パウロの様子を伺い、見つめた。ところが、パウロは蝮を火の中に振り落とし、何の害も受けなかった。いつまでたっても何も起こらないのを見て、住民たちは考えを変え、「この人は神様だ」と言った。マルタ島には毒蛇は生息していないそうで、使徒言行録の著者が、パウロは神の守りの中にあることを強調して、そのように書いている。また、「正義の女神」とは偶像であり、真の神の前では、偶像には何の力もないことを訴えたいのもあろう。

この事件があったのはマルタ島の長官のプブリウスという人の所有地の近くであった。彼はパウロたちを歓迎して、3 日間、手厚くもてなしてくれた。時に、プブリウスの父親が熱病と下痢で床にいたので、パウロはその家に行って祈り、手を置いて癒した。この癒しが島の住民たちに伝わり、病人たちもやって来て、癒してもらった。使徒言行録 19 章 11 節、12 節に「神は、パウロの手を通して目覚ましい奇跡を行われた。彼が身につけていた手ぬぐいや前掛けを持って行って病人に当てると、病気はいやされ、悪霊どもも出て行くほどであった」と書かれているように、奇跡を行うパウロを伝えている。島の住民たちは蝮や癒しの出来事を見て、パウロたちに深い敬意を表し、船出の時には、必要な物を持って来て、別れを惜しんでくれた。